Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

現代日本青年の文化意識 : 高校生の生活感・人生観を中心に

宮崎, 和夫

(Citation)
社会学雑誌,5:73-90

(Issue Date)
1988-03-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010760

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010760

現代日本青年の文化意識

——高校生の生活感・人生観を中心に——

宮崎和夫

一　はじめに

高学歴社会といわれるように、高校への進学率が九四・二％（昭和六一年度）という今日では、学習意欲や学力の程度にかかわりなく、十代の後半の青年のほとんどが高校教育の中に組み込まれるようになった。しかもその青年たちの大多数は、時間的にも体力的にもかなりの余裕を持ちながら、フォーマルな社会的責任をほとんど果されることなく、高等学校とのかかわりの中だけで生活しているのであるから、十代後半の「青年」の問題は、即、高校生問題といえよう。

彼らの生活のすべてである高校という社会集団の中で、彼らのいろいろな感情や意識が形成されるが、その基底にあって大きく作用しているものとして、不本意入学や志望外入学の意識があるといわれている。[1]

われわれの行った調査「高校生の生活と進路」[2]によると、表1の〈高校進学理由〉に示すごとく、進学の理由は「大学へ進学のため」が四〇％で最も多いが、「中卒では肩身がせまい」「みんなが行くので」「友人とのつきあいやクラブ活動を楽しみたいので」「ただなんとなく」など無目的ともいえる本来の高校教育と関係のないものを合計すると三二・五％にも達する。

また表2の〈現籍校への入学志望〉にみられるように、現在在籍している高校への志望外入学が一三・八％あり、「他の学校でもよかった」を合わせると五二％になる。つまり明確な志望どおりは四八％であった。

現代の中学生は、教育の機会を拒否されたのではないが、学校以外の道を選択することをむずかしくされているのである。たとえば、中卒で就職することの不利は、低学歴マ

表1　〈高校進学理由〉

	%	N
1．中学卒業だけではかたみがせまいので	4.2%	91人
2．みんなが行くので	11.2	244
3．職業につくための専門的知識や技術を得るため	8.6	187
4．高校卒業者の方が中学卒業者よりも就職に有利だから	9.1	198
5．教養を身につけたかったので	9.8	213
6．大学など上級の学校へ進学するため	40.0	868
7．友人とのつきあいやクラブ活動を楽しみたかったので	9.3	201
8．ただなんとなく	7.8	170

（N＝2,198人）

表2　〈現籍校への入学志望〉

	%	N
1．積極的に希望していた	48.0%	1,046人
2．他の学校でもよかったが、たまたまその学校へ進学することになった	38.2	833
3．ほんとうは、この学校に進学したくなかった	13.8	302

（N＝2,198人）

すればどこかの高校へは入学できるわけである。[4] そこで中学の教師は、本人の適性や希望を無視してでも生徒を偏差値で「輪切り」にし、ランクづけをして入学希望と異なった学校へでも押し込むのである。たとえば、神戸市の第三学区の各中学校では、平均三百人の中三の生徒を十一の公立普通科高校のランクに区分けする。その上下に私立高があり、さらに広域学区の職業高校が絡む。したがって偏差値による生徒の仕分けは熾然をきわめ、点数もコンマ以下の争いとなる。

そして、教育の機会を拒否されるのではなく、むしろ教育以外の道を選択することを拒否されている彼らにとって、学校は自らの意志に反して、そこに入ることを強いられる。少しオーバーな表現をすれば、軍隊や刑務所にも似た一種の社会的強制収容所となってあらわれる。さらに換言すれば、学校は彼らにとって社会の抑圧機構のひとつとなってイノリティの烙印を一生背負うことになり、生徒たちもそのことを予知しており、また親たちもせめて高校だけはと、高学歴社会の中で考える。そして本人の意志を無視してでも、高校へ押し込もうと強制する。[3]

また、中卒で浪人することは大変な勇気がいることであり、かつユニバーサル化され、しかも高校のランクがピラミッド化された今日のしくみでは、ランクを順次下げさえ

いるのである。

二　管理機構としての学校

(1)　違反切符制

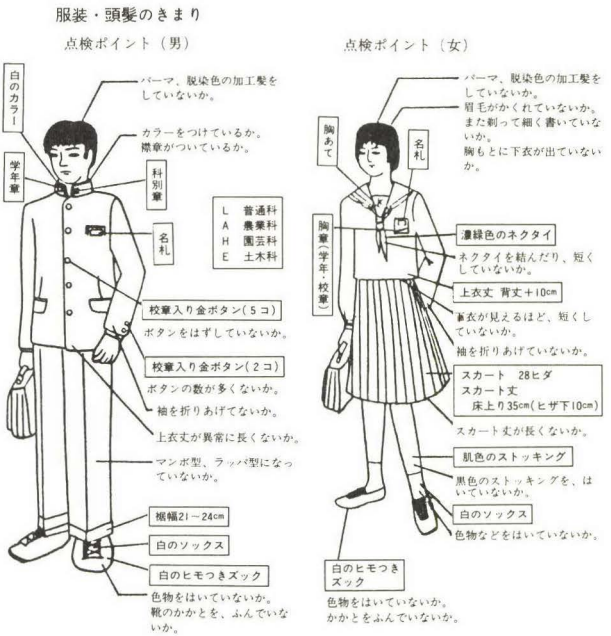
生徒手帳に切符が付けてあって、服装違反は一点、単車登校は五点というように、校則に違反すると切符を取られ、持点の十点がなくなると停学処分になる。四月になって学年が変わると更新してもとの十点にもどる。まるで自動車の交通違反の取締りそのままのような制度である。

ところが案外、生徒には好評である。靴下の色の違反ぐらいで、非行呼ばわりされ、一時間以上もお説教され、成績のことやらいろいろと引き合いに出されて、あげくの果は、全人格を否定されるような発言まで聞かされるくらいなら、切符制の方がはるかにいいというのである。教師の方も違反事項、違反者数ともに多過ぎて、こうでもしなければさばき切れないというのである。

(2)　微に入り細にわたる校則

校則違反は非行の始まりとかいわれているが、生徒手帳に記載されている「生徒心得」をみると、禁止事項、取締規準がこと細かく規定されている。その一例として、服装規定を紹介しておくと次の図のようになる。

しかし、取締り規準を全県的に集めて、よくみると、おおむね成績や進学率による学校階層やランクと取締りのきびしさ、細かさとが相関している。さらに学校の社会的評価への自信の度合とも関連しており、下位の学校になるほど世間の風評を恐れて、隠蔽性と予防性が過度にわたるきらいがみられる。



(3)　監視装置としての学校

学校連絡会で警官が「そこまでおやりになると、きりが

ありませんし、大変でしょう。」といったのに対し、教師は「われわれが早期発見と防止をねらって、オーバーワーク覚悟でがんばっているから警察はまだ楽なんですよ。われわれが手をゆるめたら、警官は今の二倍以上必要となり、県財政がパンクしますよ」と答えたという。

警官が教育的配慮をしているかたわらで、教師が行刑的配慮をしているともいえるこの状況をつないでいる事情こそ、M・フーコー（M. FOUCAULT）が「規律・訓練」的な権力から成る「監禁群島」と呼んだ現代的管理社会なのである。学校も病院もフーコーによれば「つつましやかで疑い深い権力が機構そのものの中にビルト・インされ、その権力が相互監視のうちに自動的に機能するように仕組まれた一つの装置である」[5]ということになる。

(4) 生徒間の階層序列と罰

生徒間の階層序列は、そのものが懲罰制度として機能する。最下位にあることは「規格外」のレッテルを貼られ、烙印を押され、さらにスティグマ効果をもたらす。刑事裁判で判別されるような禁止を中心とした単純な二分割ではなく、肯定面の極と否定面の極の間に問題行動の全てが並べられ、しかも刑事裁判のように条文に違反する行為の一部を切取って罰するのではない。「観察可能な諸現象の一つ一つの総体」を、場合によっては生徒の人格まるごとを学校（教師集団）が決めた価値尺度の上に序列化するのである。つまり、一定の「規格」への矯正と画一化をめざすこの懲罰システムは、刑事裁判よりはるかに微に入り細にわたって罰するのである。

こうして「規律・訓練」の施設としての学校は、法律では空白にしてある部分までをもことこまかく取締るのである。その意味においては、まさに「非行」は、学校の「教育的配慮」の産物であり、教育活動の産物である。そのような管理機構としての学校社会の中で生徒の意識や価値観が形成される。生徒文化もまた、まさに、このような学校社会の構造の中から産出されるものなのである。

三　高校生の生きがい

少々前置きが長くなったが、「はじめに」と前項で述べたような学校社会の中で、彼らはどのような将来への見通しや生きがいを持っているのかを探ってみよう。

私が神戸市内の普通科高校二年生を対象に、昭和五九年七月に行なった「高校生の幸福感調査」をもとに述べる。調査は、有名進学高校の私立男子高から百名、比較的恵まれた所得階層の生徒が多く短大まで続いている私立女子高から百名、進学率・所得階層ともに平均的な公立高から二百名、計男女各二百名、総計四百名を抽出し、質問紙法で調査した。

(1) 「生きがい」と「学校への行きがい」

まず、この調査の末尾に「〈しあわせ〉や〈生きがい〉〈学校への行きがい〉について、思っていることがあれば自由に書いて下さい」という欄に書かれていたものの中からいくつかを紹介しよう。

例A　〈しあわせ〉っていうのは、自分がそう感じていればそれでいいんじゃないですか。〈生きがい〉にしてもひとつまちがえたら逃避になってしまうし、〈学校への行きがい〉なんて義務感で行っている面が大部分。ただ私は、ちょっと好奇心が強いから、友人のことやクラブ活動、趣味のことなどいろんなことに首を突込んで結構楽しんでいますけど。　（私立女子高）

例B　いまの生活に不満をいえばいくらでもいえる。そうすると幸福でないことになるかも知れない。しかし、毎日そう不自由でもなく、健康にくらしている。物質面からみるといろいろ不満もなくはないが、精神的にはこれでよいと思っている。　（公立高男子）

例C　ぼくは、みんなのようにステレオもパソコンも単車も持っていない。生きておられることは、ある意味では幸福であるかも知れない。かといって、自分の学力を考えると目的に向かってばく進することもできない。幸福だなあとか生きがいを実感したこともない。まあしいてあげれば、寝ころんでマンガを読んでいる時にそれらしきものを感じる。いつも何か自分にわからないモヤモヤしたものが心の中にある。　（公立高男子）

例D　私の〈しあわせ〉は健康で、よい家庭と友人に恵まれていること。〈学校への行きがい〉は、学校へ来て友人とおしゃべりすること。　（公立高女子）

例E　苦しくてつまらぬことが多いが、やはり勉強に対する気迫、これを充実させることを念頭において生活している。受験が苦しいとすれば、その中において友であり得る友こそ真の友であろう。　（私立男子高）

例F　いま勉強中心の生活をしているし、それだけでも苦しんでいるので、とてもじゃないけど、ゆっくり自分をみつめたり、自分のためになることは何かなどと考えたりすることに手がまわらない。すべて大学に合格してからのことだと思っている。　（私立男子高）

右の例からみると、現代の高校生は、例EやFのような一部を除き、「幸福感」「生きがい」を主として家庭・健康・友人・クラブ活動など日常的なものの中にその要因を求めており、それらに恵まれているか否かを中心に考えている。

見田宗介は「日本人の〈生きがい〉感の中に〈健康第一〉という考え方があり、それは日本人共通の価値観である。そのような考え方になるのは、日本人がたとえば仕事とい

うような、何かをなしとげていくことに対してよりも、まず平穏無事に、現在あることに本源的な価値を見い出すからであろう」と述べている。

高校生の場合でも、基本的には同じ傾向がみられる。後述するごとく、「なす」ことよりも「何々であること」「何々があること」「何々を持っていること」により多くの幸福や生きがいを見い出している。

表 3　〈現在の幸福感〉　(%)

	私立女子高	私立男子高	公立高	男子計	女子計	全体(総計)
幸福だと思う	14.7	18.0	6.8	12.2	13.8	13.0
まあ幸福	49.5	41.8	12.5	27.2	42.2	34.7
どちらともいえない	28.4	28.8	39.1	33.9	30.3	32.1
あまり幸福ではない	6.3	8.1	35.2	21.7	11.3	16.5
幸福ではない	1.3	3.3	7.0	5.2	2.4	3.8

(2) 現在の幸福感

「現在の自分の生活を幸福だと思うか」という問い（五段階）に対する結果は、上の表3のようになった。

「幸福だと思う」と「まあ幸福」を加えて、一応幸福だと思うものは四七・七%になり、それは、「あまり幸福ではない」と「幸福ではない」を加えて幸福ではないとするもの二〇・三%より多く、およそ半数近くのものが、幸福感を持っている。

また、わずかであるが、男子よりも女子が、公立より私立高のほうが幸福感が高い。

全体的にみると以上のようであるが、生徒の生活空間のそれぞれの領域での幸福感をみた別の集計結果によると、健康・家庭・友人などの領域では、比較的多くのものが幸福感を持っている。一方、生活の充実感・異性との交友・自己の性格や容姿などの領域では、幸福感を持っているものが少ない。換言すれば、これらの領域では、悩み、不満、不充実感などを持っているものが比較的多い。これらの結果から、現在の生活について、個々の領域ではかなり不満があるものの、その不満が、生活全体としての幸福感をおびやかすほど強いものではない。つまり多少の不満はあるが「まあ幸福」というのが現状とみていいのではなかろうか。

(3) 未来の幸福に対する展望

未来に対する展望を百点満点で自己採点させたものをまとめると表4のようになった。

「将来、安定した収入が得られると思う」「将来、幸福な家庭をきずけると思う」「将来、価値ある生活ができる

表4　〈未来への幸福の展望〉　（100点満点の平均点）

	私立男子高	私立女子高	公立高	男子計	女子計	全体（総計）
将来価値ある生活ができると思う	75.1	49.8	62.0	64.2	60.6	62.3
将来幸福な家庭をきずけると思う	64.0	68.2	62.8	61.8	68.2	65.0
将来自分の人生目標を実現できると思う	64.9	59.2	56.5	62.0	58.4	60.2
将来安定した収入が得られると思う	75.1	62.3	59.3	68.3	62.9	65.6
将来社会に役立つ人間になれると思う	64.9	47.3	46.3	62.0	45.4	52.8
将来希望の職につけると思う	67.6	50.6	54.8	59.9	54.1	57.7
将来社会的に成功できると思う	59.4	58.0	49.2	57.0	54.0	55.5

と思う」などの項目が高い得点になっている。マイホーム主義的な幸福に対しては、比較的明るい展望を持っていることがうかがえる。

女子は、「幸福な家庭」に未来を託し、男子は、「安定した収入」を願っている。女子では、「安定した収入」と「希望の職」の点数が男子に比してやゝ低い。これは女性の自立、特に経済的・職業的自立に対して、高二段階ですでにある種のあきらめがあるのかも知れない。

男女共通して「社会的成功」の点数が低いが、これは、未来への展望がないというよりも、関心そのものがあまりないとみたほうがよさそうである。

(4)　自己肯定的幸福

右の結果からみると、平均して六〇点くらいの幸福感である。現代の高校生は、現実の自己の生活をかなり肯定的にみている。自分の生活がまあ幸福だ、幸福になれると感じているものが多い。そして、その幸福感を支えているものは、とりたてて大きな不満を感じていないということである。これらの幸福感は、穏健な小市民的マイホーム主義的なもので、「非常に幸福だというほどでもないが、まあたいした不満もないから幸福である」あるいは、「非常に不幸だとは思わないから、どちらかといえば幸福なのでしょう」という程度の自己肯定的幸福である。

「社会的成功」をねらうような、あるいは「社会に役立つ人間になろう」とか「社会的変革に力をそえよう」といったような積極的に外界や社会に働きかけようとする気迫

は少なく、またそがれてしまっており、「そんなことは私がしなくても」とか「そんなことはできっこないし、やれてもたかがしれている」と無力感が先に立ってしまう。要するに、管理社会下における消極的な省エネルギー型の幸福感である。

(5) 生きがいと幸福感

これまで幸福感と生きがいを厳密に区別せずに述べてきた。〝生きがい〟ということばは、幸福感とほぼ同義に使われる場合もある。しかし、いわゆる〝幸福感〟、特に〝所有の幸福感〟とは、前述したごとく、単車やステレオが欲しい、恋人や友人が欲しい、お金がほしいとか、あるいは一流大学や大企業へ入りたい、健康でもっと強靱なからだがほしい、もっと美人になりたい……等の現在にかかわる幸せである。

それに対して、いわゆる〝生きがい〟とは、われわれ人間に自分が生きている意味、生きている必要があるという存在感を感じさせるもので、現在はふしあわせであっても、逆境にあってもいいわけで、それよりもむしろ「未来に開かれたもの」である必要がある。〝生きがい〟は幸福の一種ではあるが、幸福即生きがいとはいえない。〝生きがい〟は、自己の内部にひそんでいる可能性を発揮し、自己の個性を最大限に伸ばしたいという自我の中心的な欲求に関係しており、「自己実現」への発展の道が必要であろう。

(6) パッシブで省エネ型生きがい

ある高校生は「私は、いま何のために勉強しているのだろう。勉強して何になるのだろうと考えていくうちに、だんだん勉強の意義がわからなくなってきた。大人になって会社や家庭に入ってもこんなむずかしい物理なんて使わない。微積分だって複素数だって必要ない。十数科目みんなできないといけないなんて、ダ・ヴィンチのような万能人でもない私には、とてもできっこない。クラブ活動にしても、あの激しさにはとてもがまんできない。学校へは、友人とのおしゃべりだけが楽しみで来ている」と書いている。

ここで問題になっているのは、価値の感じられない勉強をなぜしなければならないのかという形で、消極的で未熟ではあるが、形骸化しかけている高校教育の意味や学校での生きがいを素朴に問いかけているといえないだろうか。

前述したように、現代の高校生は安定と適応の現代的〝所有の幸福感〟は持っている。健康、家庭、友人などについては、幸福感を感じており、異性、学校生活などの領域では不満や不充実感を持っているものの、その不満が現在の幸せをおびやかすほど強いものではない。しかし、これらの高校生がほんとうの意味での充実感を持っているのだろうかという疑問が残る。

この調査で「充実感や生きがいをどんなときに感じるか」という問いに対して、「感じたことがない」とか白紙が最

も多かったが、書いているもののほとんどが、友人とのおしゃべり、クラブ活動（それも激しい練習のない趣味的で自由な雰囲気の同好会的なもの）などしかあげないのである。

前章の二「管理機構としての学校」で前述したような管理社会の中に埋没し、アイデンティティのない幸福の中に安住して、そのワクの中での安定と適応に、まあそれほど不満がないのだから生きがいはそう感じなくても幸せというべきなのだろうと、「若年寄り」といおうか、青年らしからぬ高校生が多くなっているといえないだろうか。

現代の高校生は、「不確実性の時代」の中にあって、「未来への展望」「未来につながる開かれた幸福感」＝「生きがい」を見い出しえず、現在的幸せ、所有の幸福の中に自己を埋没させ、マイホーム的にならざるをえない現状があるのではなかろうか。

四　現代高校生の生活タイプ

現代高校生を生活意識からみて分類すると次の四タイプが目立つ。

1、パッシブ人間型……太平ムードと情報化社会、コンピューター時代、管理社会化を反映してか、未来がみえたような気になって、何をやってもたかが知れている、何ができるというのか、そうたいしたことはできはしないではないかと、若くして早くも自己の未来にみきわめをつけ、「若年寄り」となり、片隅の幸福に甘んじながら、しかしいつか「幸福」が訪れないだろうかと願うパッシブ型青年。

2、省エネ型……タテマエでは努力を口にするものの、実際には成功の条件はチャンスと〝運〟であるとし、「あまり努力しないで、そこそこのマイホーム的幸福を期待する」という省エネルギー的青年。

3、薄皮漫頭型……外側は、非行や教師反抗など突っ張っているが、一皮むくと中身は甘ちゃん型。

4、浮遊型……無関心・無感動ではないのだが、エンジンのない車みたいなもので、自分では走り出せず、その方向も見い出せないので、なんとなく、みんなとメダカのように群れ浮かんでいる。付和雷同しやすい大量の生徒の群れ、こんな生徒が量的には最も多い。

五　新人類の生活感

社会学者の中野収は「まるでエイリアン」[6]といい、同じく藤竹暁「行列好きの若者」[7]といい、現場の高校教師は「どうも生徒の世界が見えにくくなった」「高校生は何を考えているのかよくわからん」「つかみどころがない」「なんと

なく薄気味悪い」「浮遊族だ」などという旧人類からの声を多く聞くようになった。

確かに、最近の高校生はおとなしくなった。近頃「校内暴力」という言葉もマスコミにはついぞ登場しない。まるで海月のようにおとなしく、群らがって漂っている。割り込むといつとはなくスーッと消えている。刺されはしないかと触れるのは、なんとなく躊躇する。透明のようでいて不透明である。刀向ってきたり、反抗したり、反撥したり、ハネ上ることもない。ひと頃のように「関係ねぇだろー」と突っ張りもしないし、昭和四十年代のあの学園紛争の頃のような政治的、イデオロギー的論争をしかけてくる者などは全くない。非常におとなしいのである。

それでは、おとなしくなって何の問題もないかといえば、そうではない。教師側からみた問題的特徴をあげてみると、

①教師に向かってこないが、さりとて、言うこともきかない。

②反抗的ではないが、興味のあることしかしない。

③ホーム・ルームや生徒会など公的集会が成立しにくい。体育祭・文化祭などの学校行事も集団として機能しにくくなっている。

④他人がどう思っているかをとても気にする。

⑤進学校などでは、集中力のある生徒もいるが、その視野は極端に狭い。

どうも最近の新人類とか、新々人類といわれる高校生は、つかみどころのないおとなしさが、イヤに目立つのである。

そこでわれわれは、大阪府下の高校二年生を対象に意識調査[8]を昭和六二年七月に実施した。高校のランク・地域などを考慮し、公立高十四校、私立高六校、うち普通科十五校、職業科五校（工業科二、商業科三校）の計二十校、男子一三九〇人、女子一四九二人、合計二八八二人で、質問紙法で実施した。詳しいことは、目下分析中であるので、本稿ではとりあえず、単純集計レベルでのデータをもとにして、およその傾向を述べてみたい。

(1) 政治ばなれと保守化

表5をみると、第1軸は、政治離れ、第2軸は、伝統志向ないしは保守化、第3軸は、安定志向、第4軸は、小市民的自己中心性と読むことができよう。

まず、第1軸と第2軸をみてみよう。

昭和六一年のビッグニュースの一つは、衆参ダブル選挙における自民党の圧勝であろう。これでさしあたり日本社会の、少なくとも政治については、保守化の流れが定着したといえるのかも知れない。

ここで問題になるのは、青年はどうであろうかということである。若者の保守化ということが指摘されて久しい。確かに、ここ十数年を眺めてみても、昭和四二、三年頃の全共闘世代のみせた反体制運動を最後として、全国規模の

表5　生活意識（主因子分析）

VARIMAX ROTATED FACTOR MATRIX	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4
2 政治に熱をいれるよりも自分自身の仕事に精を出した方がよい	0.57507	0.12795	0.02924	0.09854
4 政治がどう変わろうと自分の生活には関係がない	0.51760	0.19672	0.03237	0.28130
7 国の政治や経済について他の人と話をすることはほとんどない	0.61586	−0.07777	0.16107	−0.19978
12 政治のことはやりたい人にまかせておけばよい	0.62235	0.16752	0.08548	0.31617
13 社会的な問題にかかわることよりも自分の生活を大切にしたい	0.52361	0.11431	0.26240	0.39463
16 政治のことはむづかしすぎて自分にはとても理解できない	0.68155	0.08753	0.13755	−0.10706
17 われわれが少々がんばったところで政治はよくなるものではない	0.59378	0.04535	−0.04140	0.12698
3 以前からなされてきたやり方を守ることが、最上の結果を生む	0.11609	0.62797	0.18281	0.08015
11 権威ある人々には常に敬意を払わなければいけない	0.00818	0.65869	0.07857	−0.07804
18 伝統や慣習に従ったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題を引き起こすことになる	0.16921	0.57370	0.00592	0.09841
19 この複雑な世の中で何をなすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである	0.06242	0.60035	0.08941	0.08206
5 幸せな生活ができればほかに望むことはない	0.15391	0.04171	0.67876	0.14300
8 おだやかで変化のない生活がしたい	0.02043	0.23565	0.70998	0.14157
14 世間的に有名になれる仕事より平凡でも安定した仕事がしたい	0.10072	0.10806	0.70258	−0.21871
6 まわりにしばられないで、自由気ままにくらしたい	0.19026	−0.15329	0.17371	0.44703
9 他の人の世話をやくよりも自分のことを優先する方だ	0.01742	0.03035	−0.04273	0.65337
10 いくら利益が多くても世の中の役にたたない仕事はしたくない	−0.17106	0.27342	0.07240	−0.37250
15 自分が困らない限り好きなことをなんでもやってよい	0.13488	0.16015	0.06989	0.61182
1 世の中の不正や矛盾に腹立たしく思うことがしばしばある	−0.18557	−0.18658	−0.18010	−0.10802

（5段階尺度：4軸までで説明率52.8%）

反体制運動は影をひそめた。むしろ若者たちは、はっきりとその種の運動に背を向け始めた。生徒大会や学生大会は成立しなくなり、学園祭は模擬店がずらりと並び、催しはテレビ文化の復習の場となってしまった。そして、平和で素直な、チョッとばかり目立ちたがりの若者が氾濫し、そこにはいささかの「革命」の匂いもない。表6にみられるように、若者の政党支持傾向は、自民党支持の増加、社会党支持の低落、それにもまして、大幅な支持政党なし層の増大がみられる。このようなデータにみられる若者の政治意識を「保守化」と断定するのは、いささか早計過ぎよう。確かに自民党支持が社会党・共産党支持を上回っている現状において、若者は保守化しているとみられるかも知れないが、支持なし層が圧倒的に厚いということは、彼らがイデオロギーにおいてはっきり保守化しているのではなく、ただなんとなく大きな変化を嫌っているだけといえよう。彼らの実感からすれば、保守であろうが革新であろうが、おしなべて政治的なるものは「ダサイ」ものであり、彼らの関心外なのである。今の若者にとって、最もイヤなものは、変化、特に生活構造の変化なのであろう。とすれば、これは、「保守化」というよりも、「政治離れ」と現状維持ないしは「安定志向」とみることができよう。

表6　支持政党　(%)

1 どの党にも投票したくない	39.1
2 自民党	22.6
3 社会党	17.2
4 公明党	7.5
5 民社党	2.1
6 共産党	6.6
7 社会民主連合	0.3
8 その他	4.6

(もしあなたが、今、投票権をもっているとすれば何党に投票しますか。あてはまるものを一つだけ選んで番号に○をつけてください。)

(2) 伝統志向と序列容認

表7によると1「世間に古くからあるしきたりにはもっともなものが多い」17「自分の生まれ育った土地から離れたくない」23「自分の親や先祖の生き方を子孫に伝えていきたい」などいずれも三〇%台で肯定的であり、否定を上回っており、また、27「自分の生家はできるだけ守っていきたい」19「お墓まいりは年に一～二回はする」などは四〇%台と高い。4「親や先生の意見にはすなおに耳を傾ける」8「将来の進路など、大切なことを決めるときには親によく相談する方だ」も五〇・六%と高く「素直」である。9「世話になった人には、恩がえしを」八二・一%と高率であり、伝統志向、ふるさと志向、長幼の序志向がみられる。

また、「今の世の中は能力と努力しだいで誰にでも成功のチャンスがある」「だれでも努力すれば、高い地位や収入を得ることができる」と思いながらも、6「仕事によって収入に差があるのは当然」六九・一%、28「世の中には色々の意味で能力の高い人と低い人がいる」七六・五%と

能力差、所得差を容認し、それらは、31「今の世の中では親の社会的地位や収入によって子供の将来はかなり決まってしまう」四九・五%、32「個人の地位は学歴によってほとんど決まる」六一・〇%と、学歴社会や親や家庭の規定

表7　伝統志向

		は　い	どちらとも	いいえ
1	世間に古くからあるしきたりにはもっともなものが多いと思う	32.6	46.8	20.6
4	親や先生の意見にはすなおに耳を傾ける方だ	34.4	33.3	32.3
5	時には目上の人に逆らうこともある	63.2	22.2	14.6
6	仕事によって収入に差があるのは当然だ	69.1	23.4	7.5
7	年上の人の言うことには自分をおさえてもしたがう方だ。	30.1	36.0	33.9
8	将来の進路など、大切なことを決めるときには親によく相談する方だ	50.6	22.7	26.7
9	世話になった人には、できれば恩がえしをしたいという気持ちになる方だ	82.1	13.9	4.0
11	宗教や信仰にはまったく関心がない	56.2	20.1	23.7
14	世の中の不公平や差別にいきどおりを感じることがしばしばある	56.9	31.0	12.1
15	親戚とは多少がまんしてでもつき合う方だ	45.5	35.5	19.0
16	なにか困ったことがあるときに頼りになるのは友人よりも親兄弟（姉妹）だと思う	25.1	36.1	38.8
17	自分が生まれ育った土地からできるならば離れたくない方だ	39.2	31.4	29.4
18	今の世の中は能力と努力しだいでは誰にでも成功のチャンスがあると思う	67.4	18.6	14.0
19	お墓まいりは年に１～２回はする方である	48.7	13.5	37.8
20	老人や障害者にとって今の社会はくらしにくいと思う	62.6	26.3	11.1
22	お守りやおふだなど、魔よけや縁起ものを自分のまわりにおいている	36.9	16.3	46.8
23	自分の親や先祖の生き方を子孫に伝えていきたい	34.2	40.6	25.2
24	大安、仏滅などの「お日がら」を気にする方だ	25.8	22.3	51.9
27	自分の生家はできるだけ守っていきたい	45.3	36.6	18.1
28	世の中には色々の意味で能力の高い人と低い人がいると思う	76.5	19.2	4.3
30	だれでも努力すれば高い地位や収入を得ることができると思う	54.3	23.3	22.4
31	今の世の中では親の社会的地位や収入によって子供の将来はかなり決まってしまうと思う	49.5	31.3	19.2
32	個人の地位は学歴によってほとんど決まると思う	61.0	20.7	18.3

（５段階尺度、〔1.あてはまる、2.どちらかといえばあてはまる、3.どちらともいえない、4.どちらかといえばあてはまらない、5.あてはまらない〕を１と２を「はい」、３を「どちらとも」、４と５を「いいえ」にまとめた）

力を肯定している。

これらをどうみるかであるが、「素直さ」は、前述した「学校の管理体制」が大きく作用していることが考えられるが、能力差、学歴社会の容認は、偏差値による「輪切り」や画一化教育に負うところが大きいと考えられる。伝統志向は、先に述べた保守化と同様で、「安定志向」とみておく方が妥当といえるのではなかろうか。この点について次に述べる。

(3) 安定志向と拘束拒否症

「おだやかで変化のない生活がしたい」「世間的に有名になれる仕事よりも平凡でも安定した仕事をしたい」などの第3軸は、若者の安定志向を、また、「まわりにしばられないで、自由気ままにくらしたい」などの第4軸は拘束を嫌う傾向性を示しているといえよう。

高校生は、将来について表9にみられるように、就職、戦争、資源の枯渇、公害などに多少の不安は抱いているものの、表8にみられるように、将来の見通しについては、「明るい」「どちらかと言えば明るい」合わせて、三五・一%と楽観的である。また五六・二%が「現在、幸せだ」としている。(表10)この満足度の高さは、アメリカ、イギリス、フランスなどの国々よりも高い。若者たちがかくも高い満足感に満ちている以上、いささかでもそれを減退させる可能性をもつ勢力に魅力や共感を抱くべくもないだろう。革新勢力とは、そのイデオロギーが何であれ、古来、欲求不満、特に若者のそれを肥やしとして成長してきたのであるが、この肥料は明らかにその供給源を失いつつあるといえよう。そして、若者たちは、前述した二の「管理機構とし

表 8　あなたは**自分の将来の見通し**をどう感じていますか。一つだけ選んで下さい。　(%)

1	明るい	10.6
2	どちらかと言えば明るい	24.5
3	どちらかと言えば暗い	14.6
4	暗い	6.0
5	わからない	44.3

表 9　あなたは**将来になにか不安**を感じていますか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。　(%)

1	特にない	26.7
2	不況による就職難	42.1
3	父親の単身赴任や職場の変更によって家族がばらばらになること	2.7
4	地震や台風による災害	8.1
5	水、空気、食物等の汚染	21.1
6	日本が戦争にまきこまれる不安	31.7
7	石油や森林などの資源がなくなること。	32.7
8	物価高による家計不安	20.4
9	政治の腐敗や右傾化	12.6

表10　あなたは**現在幸せ**だと思いますか。　(%)

1	幸せだと思う	56.2
2	どちらともいえない	34.1
3	あまり幸せではない	9.7

ての学校」、三の「高校生の生きがい」のところでみたように、「どうあがいても、世の中、それほど変えられるものではない」し、現在の社会も「それほど不満でもない」から「まあ、こんなところでいいんじゃないですか」と安定志向に落ち入っているのである。

表11にみられるように、1「他人から、変った人と思われるのはいやだ」四四・四%、2「自分の言いたいことをおさえてもまわりに合わせることが大切である」三六・二%、4「なに

表11　安定志向

		は　い	どちらとも	いいえ
1	他人から「変わった人」と思われるのはいやだ	44.4	26.2	29.4
2	自分の言いたいことをおさえてもまわりに合わせることが大切である	36.2	35.1	28.7
3	他人のうわさや評判はあまり気にならない方である	18.9	18.2	62.9
4	なにかを決める時は、他の人の判断や意見を聞いてから行うほうが無難だと思う	67.6	22.1	10.3
5	誤っていることを指摘していやがられるよりもだまっているほうである	32.2	33.2	34.6
6	自分が正しいと思ったことは、たとえ反対があってもあくまで押し通すべきだ	41.2	39.2	19.6
7	人から理解されなくても自分なりの生き方をつらぬくべきだ	53.2	33.6	13.2
9	話合いの場で少数意見を主張するのは苦手なほうだ	50.0	27.5	22.5
11	他の人のできないことや新しいことに積極的にチャレンジするほうだ	27.2	36.4	36.4
13	他人のめんどうをみるのが好きな方だ	43.4	33.3	23.3
15	リーダーになって苦労するよりはのんきに人に従っているほうが気楽でよい	35.7	33.7	30.6
16	他の人から指示されたり忠告されたりするのはいやなほうだ	55.5	23.2	21.3
21	いつも自分のことに精いっぱいで他の人のめんどうまで考える余裕はないほうだ。	41.6	39.5	18.9
23	自分の決めた目標にむかってこつこつとまじめに努力するほうだ	27.5	42.5	30.0
24	つらいことやしんどいことはできるだけしたくない	47.9	27.9	24.2
25	将来のことを考えて計画を立てたり行動するほうだ	24.9	31.9	43.2
27	趣味や自分の好きなこと以外には熱心になれない	52.6	23.5	23.9
28	いやな人とでもある程度話を合わすことができる	65.8	15.3	18.9
30	欲しいものがあればすぐに手にいれないと気がすまないほうだ	36.7	25.2	38.1
31	ものごとを最後までやりとげるよりも途中でやめてしまうことが多い	40.5	29.0	30.5
33	わけもなく不安になることが時々ある	61.4	17.2	21.4
34	なにごとに関してもやる気がおこらない	23.2	33.0	43.8
35	現在の自分の生き方に満足している	44.8	31.1	24.1

（5段階尺度、〔1.あてはまる、2.どちらかといえばあてはまる、3.どちらともいえない、4.どちらかといえばあてはまらない、5.あてはまらない〕で調査したものを、1と2を「はい」、3を「どちらとも」、4と5を「いいえ」にまとめて表記した）

かを決める時は、他の人の判断や意見を聞いてから行うほうが無難」六七・六％と変化や波風を立てることを嫌う安定志向が目立つ。保守化や伝統志向とみえるものの本態はこの辺にあるのである。そして、彼らの「安定」の中味は、「積極的にチャレンジ」しない、15「リーダーになって苦労するよりはのんきに人に従っている方が気楽」であり、24「つらいことやしんどいことはできるだけしたくない」（いずれも三〇～四〇％台）のである。波風を立てないためには、28「いやな人とでもある程度話を合わす」（六五・八％）必要があるのである。さらに出来れば、16「他人から指示や忠告をされず」（五五・五％）に暮らしたいし、21「いつも自分のことに精いっぱいで他の人の面倒まで考える余裕もない」（四一・六％）ので、27「趣味や自分の好きなことに熱中」（五二・六％）して生活していきたいのである。彼らの守りたい生活、「安定」の中味は、趣味的小市民的生活なのである。そのような生活に33「わけもなく不安になることが時々ある」（六一・四％）けれども概して、35「現在の自分の生き方に満足している」（四四・八％）のである。

六　むすびにかえて

現状維持に甘んずる素直な若者が多数化したのだろうか。まず第一に、日本の若者は政治的、経済的条件において、先進国中、最も恵まれた条件を二つ備えている。その一つは兵役の義務がないこと。もう一つは失業の恐怖から解放されていることである。日本国憲法第九条と二十七条の恩恵は、日本の若者において最も大きな効用をもたらしている。この兵役免除の「特権」は、先進諸国中でも最も大きなものである。したがって、戦後四〇年、日本の若者の大部分は、政治、特に国際政治の動向を自分の「命」と関連づけて意識する必要をもたなかったといえる。要するに政治権力がこの特権に手をつけようとしない限り、若者は、ノホホンとかまえておれるわけである。

経済的に恵まれている点としては、日本の若者の失業率はきわめて低いことである。ＯＥＣＤの雇用統計（一九八四年）によれば、一九八三年の先進国の若年層（二五歳以下）の失業率はイギリス二三・二％、イタリア三二％、フランス二一％、アメリカ一六・四％であるのに対して、日本は四・五％である。日本の若者が雇用の機会に恵まれ、さしあたり食うに困らないということであれば、政治の変化を期待したり、その動きに強い関心をもつほうがむしろ不自然というべきであろう。前の(3)で述べたように、戦争にまきこまれないか、就職がうまくいくかという不安は多少もっているが、現在のところ、その二つから解放されているのである。

第二の理由として、日本人の中流意識である。実態はど

うであれ、日本人の七九・五％が中流階層への帰属意識をもっているのである。[9] 国民の大多数が――そしてもちろん若者の大多数が――前の三の高校生の生きがいの章で述べたように、そんなに豊かでもないが、そんなに貧しくもない、まあまあの生活を享受している現在を、「幸せ」と感じる。もっともその「幸せ」は先に述べたように「現在的」であり、「所有」の幸福感であるが。したがって変化は好ましくないのである。なぜなら中流意識には上昇願望と没落の不安が共存するものであるが、今日みられるような低成長社会では、変化は上昇よりも没落につながる危険性の方が高いからである。「ぬるま湯につかっているような」現状維持体質を若者たちが共有したとしてもそう不思議ではないだろう。

第三の理由は、管理社会化である。柔い心をもった素直な若者たちは、十代後半くらいの人生体験で、すでに一種の運命論者になってしまうようである。前の二の管理機構としての学校の章で述べたように、校則でがんじがらめに縛られ、画一的教育の中で、偏差値で輪切りにされるのである。偏差値で輪切りにするためには、同一学習内容、同一試験問題でなければならず、個性化や多様化と相矛盾する。毎日毎日、くる日もくる日もコンピューターが打ち出すデータで自己の位置、自己評価を迫られると、少なくとも人間には越えられない「分」があるといった知足安分の意識が植えつけられる。もはや「少年よ大志を抱け」は、偏差値信仰とコンピューター大王の威力によって死語にされてしまったようである。

このような学校生活の中で、若者たちは学年が進行するにつれ、「できること」について早々に醒めた意識が形成され、この「できること」の意識圏内に社会変革とか改革の思いが入り込む余地をなくしていくのである。なぜなら、彼らは学校生活の経験を通して、世の中は「がんばれば変えられる」ほど甘くはないものであること、「みんなと力を合わせ」られるほど他人が信用できるものでないこと。校則で細かく縛られ、少しでもワクをはみ出すとたたかれることを、またそのように思わせられる管理的教育をイヤというほど学習させられているからである。

（1）拙稿「現代高校生の不適応研究」12回シリーズのうち第2回「不本意就学と学校不適応」月刊『高校教育』学事出版一九八三年五月号、同「志望外入学と学校不適応」同六月号、同「学校生活不適応」同九月号。

（2）宮崎和夫・尾嶋史章（大阪経済大助教授）の共同調査、昭和五六年七月実施、調査実施校十三高校。全日制三年生二八九九人。（阪神間の実数の二〇％を公私立・課程・学校のランクなどを考慮して抽出）回収率七八・五％、質問紙法。

（3）拙稿「低学歴マイノリティ」麻生誠編『学校ぎらい勉強ぎらい』福村出版一九八三年所収、一四四～一六四頁。

（4）拙稿「高校生の学歴観」麻生誠・潮木守一編『学歴効用論』有斐閣一九七八年所収、一五～一七頁。

（5）M・フーコー『監獄の誕生』田村俶訳、新潮社、一九七七年、二二頁。

（6）中野収『まるで異星人』有斐閣、一九八七年、一頁。

（7）藤竹暁『若者はなぜ行列がすきか』有斐閣、一九八七年、二～一五頁。

（8）宮崎和夫・米川英樹（大阪教育大助教授）の共同調査研究、昭和六二年七月実施、大阪府下の高校二年生三千人を対象に、高校のランク・地域・学科課程・公私立の別などをコントロールして抽出、二〇校、男子一三九〇人、女子一四九二人、計二八八二人回収。質問紙法で実施。目下（一九八七年十月）まだ分析中なので、本稿では単純集計レベルのデータをもとに述べた。彼らの意識形成と家庭環境、家族構成、親の学歴や職業、学校のランクや成績、学科や課程、性別等々の関連など詳しい分析は、目下研究中なので、間に合わなかったことをお許し願いたい。

（9）『国民の意識とニーズ』（昭和六二年度国民生活選好度調査）経済企画庁国民生活局編、大蔵省印刷局、一九八七年、六頁。

（神戸市立楠高等学校教諭）